

〈研究ノート〉

## 天保期大坂における施行とその背景

——『仁風便覧』版行経緯からの分析——

鷺 見 敦 子

### はじめに

近世における天保期（一八三〇～一八四四）は、天保四年（一八三三）の大雨による洪水や冷害をきっかけとして、天保七年（一八三六）から天保八年（一八三七）にかけての大飢饉を中心に天保十年（一八三九）ごろまで慢性的な飢饉状態が続いた時期である。

気候不順を主な原因として、安永九年（一七八〇）からの連続的な凶作による飢饉・米価高騰を原因とした天明の打ちこわし<sup>1</sup>が先だって発生していたが、当時の老中松平定信による寛政の改革の一環としていくつかの対策が取られるにいたった。中心となったのが、各地に社倉・義倉を築かせ穀物の備蓄を命じる囲米と、町々が町入用の節約経費として用意した四万両の七割に幕府からの一万両を加えて救荒基金とする七分積金である。

囲米は江戸・大坂の城詰米をはじめ諸大名から都市・領村にいたるまで徹底され、特に江戸に対しては、消費人口の減少や貧民救済を策するために、旧里帰農奨励令や人足寄場の設置など農村対策とも関連させて実施された。また七分積金は寛政三年（一七九一）、貧民救済と

低利融資を目的として設立された町会所の積金を指し、幕府からの下げ金一万両以外はすべて江戸町民（地主層）から年々二、三万両ほどずつ徴収された。<sup>1</sup>

これら政策が実施されたことで、天明期に連鎖的に発生した三大都市における大規模打ちこわしに類する騒擾を、天保期には防ぐことに成功している。しかし天保七年（一八三六）六月甲斐国で起きた天保騒擾や、天保八年（一八三七）に大坂で起きた大塩平八郎の乱など、民衆の困窮が要因となった騒擾を完全に防ぎきるにはいたっていない。幕府治世のもと大きな飢饉が起きた際には、有徳者による施行行為が推奨された。そのうえで実施された民間施行を記録して幕府が版行した書籍が存在する。享保二十年（一七五三）に出版された『仁風一覽』と慶應三年（一八六七）に出版された『仁風集覽』である。そして天保期にも、四年時の飢饉に対して、五年時に大坂で施行を実施した人名一覽を記した本を幕府が版行し、民間に周知させる行動が取られた。その書籍が本稿で取り上げる『仁風便覧』である。

前述した『仁風一覽』に関しては、内容の詳細な分析による大坂・京都両都市の差異や、高額施行を行う大商人の存在に着目した北原糸

子氏、『仁風集覽』では『仁風一覽』など前時代の記録に対し大商人・寺院だけではなく個人名での施行者が増加していることに着目した小林丈広氏<sup>(3)</sup>といった先行研究の存在を挙げることができる。しかし『仁風便覧』に関してはその存在を天保飢饉に関連して確認できる場合を除き、その版行経緯、内容に関して触れた資料は少なく、『日本歴史地名大系二八―二』<sup>(4)</sup>や『番付で読む江戸時代』内に簡単な版行説明がされるに留まっている。

本稿では『仁風便覧』分析において特にその版行経緯に着目し、大坂城代家老であった鷹見泉石の日記である『鷹見泉石日記』<sup>(6)</sup>と大坂本屋仲間の出勤帳・開板記録などをまとめた『大坂本屋仲間記録』<sup>(7)</sup>両書籍から版行および発売までの詳細分析を行った。『仁風便覧』に関連する記述を抜粋し、史料群・表としてまとめたものを論の中心とし、幕府側の人間である鷹見と町人側組織である大坂本屋仲間、この両視点からの分析で、天保期に施行記録本を版行するうえでの意図について探ることを目的とする。

## 一 幕府側からの動向

鷹見泉石は元來古河藩の家老として職に就いた人物であり、藩主土井利位<sup>(5)</sup>が天保五年（一八三四）大坂城代に任じられたことで大坂城代家老の任に就いた。前述した『鷹見泉石日記』で初めて『仁風便覧』に関する記述が登場するのは天保七年（一八三六）十一月一日のことである。この日の記事に「仁風一覽<sup>(8)</sup>拝見」の記述が見られ、鷹見が享保期の施行記録である『仁風一覽』に目を通す機会があったことがわかる。

この『仁風一覽』とは享保二十年（一七五三）五月、大坂本屋仲間記録の手によって版行された書籍である。享保十八年時（一七五一）は蝗害によって大規模な飢饉が発生し、その際にも飢人に對して施行が実施された。施行を実施した人物に関してはその名、施行記録が記載され、上巻は京都・大坂・奈良・堺・伏見の各奉行支配地、下巻は長崎ほか、西国・中国・四国・畿内幕領地の施行者が記録されている。記載された土地はすべて幕領であることから幕府の意向が強く働いたうえで版行された書籍であるのではとの推察は、留意しておきたい点である。

何故鷹見がこの『仁風一覽』に触れることになったのか、その正確な背景は史料からは不明だが、この天保七年（一八三六）は夏以来の氣候不順が原因で天明期以来の飢饉が起きており、大坂でもその対応に迫られる状況だったことは間違いない。<sup>(9)</sup>そのため享保期の施行対策の一つである『仁風一覽』について分析する必要がある。「拝見」の記述があることから命じられたうえでのものではないかとの推察が成り立つ。また鷹見自身が学者として朱子学を学んだ人物であり、仁政の一環である施行行為にもともと積極的な意志を持っていたという理由も考えられる。

『仁風一覽』を読んだ鷹見は、同七年十二月八日にいたって摂津代官である根元善右衛門の希望もあり、『仁風一覽』を持参するにいたる（『仁風一知覧御望之由二付夕方為持遣候』<sup>(10)</sup>）。

この行動は『仁風一覽』に準じた施行記録を版行したいという鷹見側の意向を伝えるためであったと考えられ、翌九日には再び根元へ挨拶をしたうえで『牧民告解』二冊を進上している。<sup>(11)</sup>これを受けて十二

月二十一日、『仁風一覽』に準ずる本（以下「仁風本」とする）版行の件について根元の話も聞いたところ、「可然儀ニ付早々沙汰有之候様被仰聞」と根元から聞かれたため大坂城代にも仁風本版行希望の意図が伝わり、「能心付之由、御賞之旨申候」と肯定的な意見が出るにいたった。そこで「江戸被仰上之儀等」を上申したところ、大坂城代から「御案調候様御沙汰」が下る事態に発展する<sup>(12)</sup>。

この時点で、それまで大坂内での動きであった仁風本版行の意図が幕府にも提案される段階にいたったと考えていいだろう。それを受けた鷹見は、翌十二月二十二日に「御進達案」を調べて城代に見せ、さらに翌二十三日には「仁風一覽之御進達、少直り御直書にて加賀守様（老中大久保忠実）への御内慮伺出候由」事態となった<sup>(14)</sup>。

以上が『鷹見泉石日記』から確認できる『仁風便覧』版行に関する記述だ。まとめると、鷹見が享保期の書籍である『仁風一覽』を読み新しい仁風本の版行を思い立ち、それに幕府代官根本が賛同したうえで大坂城代・幕府老中へ御進達案を献上し、版行実施への道筋を立てたというのが経緯である。鷹見自身が御進達案を調べ、幕府老中にいたるまでの期間も極めて短期間で行われていることから、この時幕府側でも仁風本の版行、それに伴う施行対策の実施に対して積極的な背景があり、迅速な対応が必要な状況だと考えていたことは間違いない。では幕府側の意向を受けて、実際に版行作業を行った大坂本屋仲間、つまり町人側ではどういった経緯があったのだろうか。分析のため、『大坂本屋仲間記録』内の出勤帳および開板御願書扣から『仁風便覧』に関連する記述があった項を抜粋し、史料群（以下史料）および表（以下表）として末尾一覽とした<sup>(15)</sup>。次章では作成資料と共に詳細を確

認する。

## 二 大坂本屋仲間の動向

『大坂本屋仲間記録』出勤帳において、初めて仁風の記述が確認出来る記事は、鷹見が仁風本を版行するという発案を出す三年前、天保期においてやはり大きな飢饉の発生した天保四年（一八三三）十一月二十五日の項である<sup>(16)</sup>（表・史料1）。秋田屋良助という本屋が、享保期に開板した『仁風一覽』のように、施行を行っている人々の名を記した本を開板したいと願い出したという内容であり、それに対して本屋仲間は奉行所に御覧いをしたうえで返答すると回答し、翌日には再度秋田屋を呼び寄せ、問い合わせをするにいたった（表・史料2）。

また天保四年十一月二十九日項では、秋田屋源兵衛という人物も「ほどこし日記」と題した施行記録の一枚摺りを版行していたことが確認できる。この事実が発覚した際、北組惣会所から年行司の渋川・森本両名が呼び出され、彼らの管轄で版行したものではないという点がわざわざ確認されている<sup>(17)</sup>（表・史料3）。

つまり天保四年の時点ですでに飢饉に対する具体的な施行は実施されており、施行に関する記録書を出したいという願いが出されたうえで、本屋個人で施行本の版行を行おうとする町人側の動きが早々に存在していたことになる。しかし天保四年時に限っては、本屋仲間内で自主規制の形を取り、すでに版行した本に関しては差し戻し、版型を本屋から回収するなどの対応が取られ、秋田屋良助の例である記録書開板の願い出しについても最終的に惣年寄中にも意見が届くことは無く、本屋仲間の内で開板禁止の指示が出されている。

同様の施行本販売に関する記述は天保七年（一八三六）九月十六日項にも見られ、その際も施行一枚摺りの販売が行われていたために調査したところ、河宗・今辰両本屋が素人（本屋仲間に所属していない本屋）から頼まれて販売していたことが判明した（表・史料5）。この事例も販売停止、版木回収の対応が取られたが、着目したいのは「素人」の記述である。「素人」たる本屋がわざわざ委託して施行書の販売を行っていたことから、施行書は客層である民衆側に需要が存在していたことが推察できる。また本屋仲間が仲間以外の販売にも対応していた点は、施行書が許可のうえ、本屋仲間の管轄で版行されるものなどの意識が徹底していた裏付けであるともいえる。

その後仁風に関する記述はしばらく途絶え、本屋側からの出版の動きも見られない時期が続くが、天保八年（一八三七）三月十五日にいたって、南組惣年寄永瀬七郎右衛門、北組惣年寄安井久兵衛兩人立合いのもと『仁風一覽』にならった記録書の版行が幕府によって正式に許可された（表・史料6）。

三月十五日夜、当会所へ将ギ嶋々、行司

不残十六日五つ時罷出候様御差紙到来二付、則十六日五つ時分役中罷出候処、永瀬様・安井様御兩人御立合二而仰聞候一条、近來米穀高直二付難済人之者多分有之、御上之御仁恵ヲ以御救米追々被為下置、尚又町人共分追々施行致候者有之、去巳年以来、江戸表分御褒美尚又御褒詞被為下置候分、去享保十九年二仁風一覽御官刻二御彫刻被為遊候段、本屋仲間江仰被為仰付候、右之趣準し板行彫刻仕度義、本屋仲間へ奉願上度申出候様、仲間中相談之上

願書惣年寄迄差出し候様仰被付候二付、仲間中相談之上願書差出し可申上候様御答申上、引取候事

但し施行人別書御下書御下ヶ被成下候義申上候処、尤之義故其段取斗可致候様仰被聞候事<sup>(20)</sup>

この前年である天保七年（一八三六）から鷹見を中心とした幕府側の仁風本版行の意向が進んでいたことは第一章で述べた。この時には北組・南組の惣年寄を立ち会わせていることから、明らかに大坂奉行所、つまり幕府側の意図で大坂本屋仲間に版行を行わせようとしたことは明白である。ここで留意しておきたいことは、版行を命じながらも建前上はあくまで本屋仲間から享保の事例に従って自主的に開板の申請をしたという形を取るよう命じられている点である。

ここには、幕府の強要では無く、あくまで「民間による施行とその記録」という体裁を取らせたい幕府の意図が見え隠れする。幕府側が飢饉時における施行という政策をどういった形で推し進めようと考えていたのか、この天保八年三月十五日の事例はそれを端的に示した例であると言えるだろう。

同年三月十七日、大坂本屋仲間内での惣寄合のうえで『仁風一覽』に準じた仁風本の版行彫刻の実施が決定し、幕府の指示通り、本屋仲間からの自主的な形で開板許可の願い出しが仲間中から惣年寄に対して行われた<sup>(21)</sup>（表・史料7）。この際、本屋仲間が施行を実施した人物の姓名を記録した下書きをもらえるよう、奉行所側に依頼していた。奉行所側が民間施行者のある程度正確な情報を把握していると本屋仲間たちは知っていたからだろう。



三月の間、本屋仲間の仕事は、仁風本下書きに関する確認とその訂正に費やされている。<sup>(22)</sup>三月二十日項には、『仁風一覽』の別帳を作り、『仁風便覧』を彫刻するに当たり序文を樹下定賢なる人物に依頼したと記述されており(表・史料9)、『仁風一覽』二冊を樹下に渡している。仁風本の序文と表題された箇所は、『仁風一覽』でも青木永澄という人物によって執筆されており、内容は近年の飢饉による困窮者の存在、それに伴う幕府および有徳者の仁政に基づいた施行実施、施行を高徳な行いとして記録するといった幕府の意向が述べられたものである。『仁風便覧』の序文執筆者として選ばれた樹下に『仁風一覽』を見本として渡したという点は、新仁風本序文にも内容を踏襲してほしい、つまり施行は幕府と有徳者による仁政なのだという点を強調したい幕府側の意向を反映したものでだろう。この月は版行が決定した十五日から、十七日、十八日、十九日、二十日、二十二日、二十六日、二十九日、三十日と日を置かず仁風本の記述が見られ、版行に向けてのあわただしいさまが確認出来る(表・史料6～13)。

天保八年(一八三七)五月一日から三日にかけて、素人板(大坂本屋仲間に所属しない本屋)による施行鑑一枚が販売されているとの問題が浮上し、その販売に仲間内の者である綿谷喜兵衛が関わっていたことから詮議が行われ、販売の停止と版木の回収という対応が取られるにいたった(表・史料14～16)。<sup>(23)</sup>ここで名前の出ている綿谷喜兵衛とは、天保四年(一八三三)十二月二十日項にも「ほどこし鑑」の板木を差し出したとして名を確認できる人物である。天保四年時には販売を行ったとの記録は無いことから、天保八年五月一日時には別物の販売を行っていた可能性が考えられ、五月三日の時点ではあくまで自

分は委託されて販売したのみであり、板木を作製したのは別の人物(難波村光泉寺平一郎)であると口述している。本屋仲間の意向に逆らってまで販売を行うほど施行書への民衆の需要があったのかという点において注目したい記述だ。

天保四年時にも施行記録の販売差し止めが確認できたが、天保八年にいたり幕府側から仁風本発売の意向が示された段階となっても、許可を得たのは幕府指示のもととめられた施行記録である。民間による本当の意味での自主的な施行記録は奉行所および幕府から認められなかったことがわかる。

五月から六月上旬にかけ下書きの読み合わせ、書入れ作業が繰り返行われている(表・史料19～27)。六月七日には願本が仕立てられ南組惣年寄安井に提出された(表・史料28)。その後も指摘された書き損じに対しさらに細かい訂正が行われている(表・史料29～32)。

このことから仁風本の記録は出来る限りの正確性が求められたものであったこと、民間施行者としてのどの人物の名を記録するかについてもおそらく詮議が行われていたのではないだろうか。<sup>(24)</sup>

また六月七日項に初めて仁風本に対して『仁風便覧』という名称が確認できることから、この時期正式な題名が決定したのでだろう。<sup>(25)</sup>

幾度かの訂正作業を経た草稿は、最終的に天保八年(一八三七)八月二十三日に彫刻御免の許可が下りた(表・史料33)。<sup>(26)</sup>ここから板木の彫刻へと進み、十一月五日には板木が刷揃った(表・史料40)。<sup>(27)</sup>そして十二月二十五日、『仁風便覧』は完成したのである(表・史料43)。

その完成を受けて、翌天保九年(一八三八)一月二十二日に大坂三郷町中へ一冊銀六匁の値で『仁風便覧』を売り出すとの触が發布され

た（表・史料46）。以下がその内容である。

#### 御触出書付之写

近年米価高直二付、貧窮飢人之救合之義、此度本屋共令板行候書物仁風便覧壹部壹冊二付、代銀銀六匁宛本屋共かり売出し候由、届候もの共買取候様三郷町中可触知候、以上<sup>28)</sup>

ここでは、一冊銀六匁という『仁風便覧』の値段と、「買取候様三郷町中可触知候」の記述に着目したい。触の中で、買い取りとそれに対する周知を命じている点から『仁風便覧』発売にはある種の強制性があり、確実に一定数を出回らせようとする動きがある。これは『仁風便覧』版行にいたった目的である民衆による施行の実態を広く認知させたいという幕府側の意図を強化させるための裏付けではないかとの推論が成り立つ。

しかしその点を考察する場合、この正規『仁風便覧』の値段についても注意する必要がある。触が発行した天保十年より二年前の相場であるが、天保七年（一八三六）時の白米相場は錢百文に付六合とされており、また男一人が一日米五合、女一人が一日米三合の配給相場も定められていた。<sup>29)</sup> 米価高騰のあおりを受けていた天保七年時の相場でさえ錢百文があれば成人男性一日分の食費に相当したと考えると、本一冊に付き銀六匁という『仁風便覧』の値はかなりの高額である。民衆が利用する貸本屋の赤本・黒本が享和年間（一八〇一―一八〇三）には十文だったことを比較しても明らかだ。<sup>30)</sup> ただし貸本でなく購入するととなると別で、書籍の値は数両するものも多くあり、銀六匁の値が

際立って高額という訳ではない。

この点から、幕府側が考える『仁風便覧』の普及はあくまで本屋仲間中、あるいは施行実施側の有徳者層に留まり、民衆への広範囲の普及はあまり考えられていなかったのではないだろうか。『仁風便覧』が正式に版行されて以降、仁風本に関する記録は『大坂本屋仲間記録』からも途絶えてしまうので、天保八年（一八三七）の綿谷喜兵衛の事例のように、民衆の施行本への需要が版行後にもどの程度存在したのかという点には現時点での明言を避けたい。

#### 小 括

本稿では『仁風便覧』の版行経緯という極めて限定的な事例に分析対象を絞り、天保期における幕府・民間の施行への取り組みと意向について考察することを目的とした。今回の分析を見ても、施行行為を是とし記録として版行する幕府側の行為には、施行は善行であり賞賛されるものであるという仁政に基づく考えと、飢饉に対する対応策として施行を行ったのだと知らしめるための宣伝、そして為政者の強制ではなく民衆が自主的に行ったとした意向が存在する。それを端的に示したのが『仁風便覧』版行は本屋仲間側から願ひ出たものであるという体を取らせた版行許可の記述であったと考える。

天保期は困窮者こそ存在したものの、三大都市の打ちこわしや餓死者の発生には陥っておらず、天明期などと比較しても、幕府の立飢饉時対策が一応の成功を見せた時期といってもいい。その成功を受けての民衆への喧伝と、実施された施行が為政者による軋轢ではないと暗に主張するために版行された書籍、それが天保『仁風便覧』であった

と結論づけて本論をしめくりたい。

# 註

- (1) 竹内誠『寛政改革の研究』（吉川弘文館、二〇〇九年）一二四頁。
- (2) 北原糸子「享保」飢饉と町方施行―『仁風一覽』の社会史的意義（『日本史研究』二二八号、一九八一年）。
- (3) 小林丈広「仁風の思想―近世後期京都の救済と町―」（『人民の歴史』一九九三年、二〇一二年）。
- (4) 『日本歴史地名大系28―「2」大阪府の地名2』一五三五頁。
- (5) 『番付で読む江戸時代』（柏書房、二〇〇三年）六四―六六頁。
- (6) 『鷹見泉石日記』（古河歴史博物館、二〇〇二年―二〇〇四年）全八巻。
- (7) 『大坂本屋仲間記録』（大阪府立中之島図書館編 大阪書籍株式会社）。全十八巻が刊行されており、本稿では  
〈第四巻〉出勤帳四 出勤帳第四十番―第五十三番（文政十一年、天保十四年正月）  
〈第十巻〉諸記録集忘備録・偶奇仮名引節用集御公訴一件仮記録・仲間触出書留 他  
〈第十六巻〉開板御願書扣一を対象とした。
- (8) 『鷹見泉石日記』第三巻（吉川弘文館、二〇〇二年）一四六頁。  
註8前掲書、一三四頁。十月廿八日項  
「当年夏以来不順之季候にて度々出水有之候、古川表、当表、御領分共、莫大之御損毛相成、双方正米、多分之御不足にて御家中渡飯料ニも引足不申候付、御不足之分、御家中払い米は勿論之儀、別段御買入相成不申候ては引足申間敷有之候処、諸国一体凶作之趣にて米値段も殊之外高直有之」と、この時期の凶作とそれに伴う米価高騰について述べられている。
- (10) 註8前掲書、一五八頁。  
十二月八日項「五過より根元様へ参。（中）仁風一覽御望之由二付

- 夕方為持遣候」
- (11) 註8前掲書、一五九頁。  
十二月九日項「根元様へ昨日仁風一覽進上之上御挨拶、牧民告解二刷為見遣」
- (12) 註8前掲書、一六四頁。  
註8前掲書、一六五頁。
- (13) 十二月廿二日項「仁風一覽之御進達御案調、（中略）御前へ出、猶又申聞持帰」
- (14) 註8前掲書、一六五頁。
- (15) 『大坂本屋仲間記録』第四巻、第十六巻を参照とした。各巻内容については前掲。また本文、内容詳細については末尾表と史料群を参照のこと。
- (16) 『大坂本屋仲間記録』第四巻、二四二頁。
- (17) 註16前掲書、二四三頁。
- (18) 註16前掲書、二四四頁。
- (19) 天保五年九月十六日項に関しては、米価高騰高値についての戯作見立の販売として記載あり。一連の施行鑑に相応するものとは若干性格が異なるものとも考えられるが、「素人」記述の着目として取り上げた。
- (20) 註16前掲書、三八八頁。
- (21) 註16前掲書、三八九頁。
- (22) 註16前掲書、三八九―三九一頁。
- (23) 註16前掲書、三九四―三九五頁。
- (24) 註16前掲書、三九五―四〇四頁。
- (25) 註16前掲書、四〇一頁。
- (26) 註16前掲書、四一九頁。
- (27) 註16前掲書、四二五頁。
- (28) 註16前掲書、四三二頁。
- (29) 小野武雄『江戸物価事典』（展望社、二〇〇九年）五四頁。
- (30) 註29前掲書、四〇二頁。

「大坂本屋仲間記録史料抜粋」

本史料群文書冒頭に割り振られた番号は、同掲表『仁風便覧』版行経緯に対応したものである。

〈史料1〉天保四年十一月二十五日

廿五日、別寄合、秋良の招提

一 米穀高直二付、施金銀米穀等施行追々被致候人有之候二付、先年御開板相成候仁風一覽之如ク、夫々名前相記シ開板致度段被願出候間、相窺候上返答可致段申入候事

〈史料2〉天保四年十一月二十六日

廿六日、惣寄合

一 昨廿五日、秋良の願出候一件、夫々旧例相しらべ致相談候処、今一応秋良呼寄得卜問合せ、相しらべ可申二相談相成候事

〈史料3〉天保四年十一月二十九日

十一月廿九日、別寄合

一 北組惣会所の年行司惣兩人呼掛有之候二付、洪川・森本兩人罷出候処、秋田屋源兵衛の売被出候、ほとし日記ト申一枚摺之義御尋二付、行司一切存不申候義御答申上候、右は御差支有之候趣仰被付、承知仕引取候事、但し行司共心得二而取斗可申旨被仰付候事  
一 右一件取調候所、ほとし日記三編を枚摺之内、式編は近江屋弥兵衛彫刻致候趣二付、秋源・近弥兩人呼寄相尋候所、兩人共板木

并二摺風売残り分共致持参相談申候故、自訴之趣二取斗口上書為差出、外二誤り一札取之、尚又売出し候分取戻し差出候様申付置候事  
一 去ル廿五日、秋田屋良助の被申出候施行人名前書等之義も、今日惣年寄衆之御沙汰二而は伺候迄茂無之義二付、秋良呼寄、右之趣二付出板不相成品之義申付候事

〈史料4〉天保四年十二月二十日

十二月廿日、定日寄合

一 綿喜、ほとし鑑、板木差出し候、口上書印形取候事

〈史料5〉天保七年九月十六日

九月十六日

一 今日薩摩屋仁兵衛殿より、京橋糴藏御寄合所へ可参候旨差紙被成、橋本老人被罷出候所、米穀高直二付戯作見立惣枚摺売居候ヲ御見受被成候二付、御差障り二も可相成候間、已来売出し不申様二と御内意有之候、依之引取候上早刻役中集会いたし板元吟味致候所、河宗・今辰相合にて、素人の被頼売弘候段分明二相聞へ、即時二兩人招呼申付、一札ヲ取板木為差出候事、売残り摺本三枚取之、此趣さつま屋へ藤徳の返答申上候事

〈史料6〉天保八年三月十五日

三月十五日夜、当会所へ将ギ嶋の、行司不残十六日五つ時罷出候様御差紙到来二付、則十六日五つ時役中罷出候処、永瀬様・安井様御兩人御立合二而仰被聞候一条、近来米穀高直二付難渋人之者多分



有之、御上御仁恵ヲ以御救米追々被為下置、尚又町人共追々施行致候者有之、去巳年以來、江戸表御褒美尚又御褒詞被為下置候分、去享保十九年二仁風一覽御官刻二御彫刻被為遊候段、本屋仲間江仰被為仰付候、右之趣準し板行彫刻仕度義、本屋仲間奉願上度申出候様、仲間中相談之上願書惣年寄迄差出し候様仰被付候二付、仲間中相談之上願書差出し可申上候様御答申上、引取候事  
但し施行人別書御下書御下ケ被成下候義申上候処、尤之義故其段取斗可致様仰被聞候事

〈史料7〉天保八年三月十七日

三月十七日、九つ時右一件二付惣寄合

一 惣寄合之上、仁風一覽二準候施行被致候人、姓名御書留メ之下書御下ケ被成下候様、且者右板行彫刻仕度開板御免被成下候様、此段口上書ヲ以惣年寄御三人名前二而差出し可申儀、一統相談之上相極メ候二付、則口上書下書相認メ、明十八日安井様御宅へ差出し候事、持参出勤、藤徳・河直

〈史料8〉天保八年三月十九日

同十九日、安井様呼掛有之、藤徳罷出候処、惣年寄方下書御差出し二而、此通相認メ早々差出し可申様仰被付候二付き、廿日早天書付差出し引取候事、調印藤徳・河義・河直

〈史料9〉天保八年三月二十日

三月廿日、定日寄合

一 仁風一件書別帳拵置候二付、右下書追々扣置候義、新三郎へ申付、仮帳致有之候事

一 右此度彫刻二付、序文之儀、河太樹下先生へ御頼申入有之、則仁風一覽二冊預ケ有之候事

〈史料10〉天保八年三月二十二日

三月廿二日、南組差紙当来、今五つ時役中不殘罷出候様申来、罷出候処先日願書差出し施行一件御免被為仰付、役中印形差出し御下書八冊拝借致し候事、夫会所へ寄合、扣本相談および筆記方へ新三郎へ申付候事

〈史料11〉天保八年三月二十六日

一 廿六日、五つ時行司老西御寄合所へ罷出候様差紙到来二付、河義・藤徳四朗兩人出候処、永瀬御氏被仰聞候義者、先日相渡し候施行書之義、御手元も御談示中之由二付、年行司手元如何在之哉、右板行二付存寄之義有之候ハ、無遠慮所存下書二致、相窺候様被仰渡候事

〈史料12〉天保八年三月二十九日

一 廿九日

右一条二付役中寄合、御下書認メ出来二付読合致候事此儀二付惣評可致相談之上、慎組敦九殿江案内致候所、風邪故外組合へ申遣し呉候様返事二付、組合之内秋市殿へ申遣し候処、是又差支有之、河宗殿・今辰殿へ申遣候様返事有之候事

今八つ時分三組相談ニ及候事

一 柏清殿出席ニ而、役中打寄咄合之上相談ニ及所存之趣、下書相認メ惣年寄方へ差出し可申候事

〈史料13〉 天保八年三月三十日

三月三十日

一 当廿二日、安井御宅ニ而施書八冊御下ケ被下候而、右書写いたし、今晦日御同人御宅江持参致返上申上候、但し御先方請取書者差出し不申候様被仰聞候事

一 右板行ニ付、存寄之義下書相認め差出候而、追而御沙汰在之趣被仰聞候事

〈史料14〉 天保八年五月一日

一 五月朔日、南組分差紙ニ付河直罷出候所、素人板ニ出来候施行鑑壹枚摺、売止メ致候様被仰渡候得共、其段少々相分兼候ニ付、即刻藤徳四朗南組へ罷越、惣年寄衆へ面会申候而、右売止メ之義者相見合申度段、三人衆へ相断申置候事

〈史料15〉 天保八年五月二日

五月二日、相場寄合

惣年寄東御寄合所今年行司御呼掛ニ付、藤徳老人・河直兩人罷出候所、御立合之上、此度素人ニ而市中分施行致候名前并二夫々員数等書頭し、壹枚摺出来ニ付素人之事故惣御年寄方分直々御調有之、相済候趣仰被聞候、此外ニ壹枚摺前後式枚、仲間之内綿屋喜兵衛分売

出し居候由、是者御公儀へ御差支ニ相成候義有之間、急々取調可申出様仰被付候ニ付、引取候上早速仲間内聞合候處、住吉分売候趣ニ付相尋候處、綿喜方分買候趣申故、綿喜方へ明三日早天会所へ罷出候差紙遣し候事

〈史料16〉 天保八年五月三日

同三日、右一件ニ付綿喜罷出候、相待居候處、四つ頃ニ喜兵衛罷出候ニ付、昨日仰被聞候趣委細申聞候所、右板行彫刻仕候全私ニ而者無御座候、則難波村光泉寺ニ同居致候平一郎と申者方ニ而彫刻摺出し、私方へ売弘呉候様申参り、無何心売遣し候儀ニ御座候、平一郎へ始末相糺ニ参り、同道仕罷出可申と存罷越候處、他国仕留守中ニ而難相分り候、家内ニ有合候板木式枚摺本七十九枚持参被致候ニ付預り置、決而売候儀不相成候段申付、右之趣口上書為差出受取置候事、追而沙汰可致申付置候事

〈史料17〉 天保八年五月六日

一 五月六日、綿喜売出し候施行録式枚物、彫刻致候人他国致、□与相分り不申候段、薩摩屋様へ申上し置候、尤板木式枚并二売残り共行司手元へ留メ置候様申上し置候、同日南組惣会所へ出候而、天満組・南組両組施行人細書等申請罷歸り候事

右ニ付、同日九つ後分寄合、夫々引合中書ニ相成候様致掛引致彫刻、市田へ申付け候義ヲ相談之上、掛下引下書河太老人持参ニ而申付候積りニ候事、掛出来上早々為摺、新三郎へ相渡し、中書相認メさせ可申候事

惣下書藤徳殿へ預ケ有之候事

〈史料18〉天保八年五月九日

同九日、四つ時合

一 仁風一件相調、中書新三郎殿へ申付置候事

中書掛板出来二付、諸口紙百廿枚、河太二而為摺候事

但し南組下書、新三郎殿へ預ケ置候事

〈史料19〉天保八年五月十四日

五月十四日寄合

一 仁風一件引合せ候事

〈史料20〉天保八年五月十七日

同十七日寄合

一 仁風一件読合并二書入候事

〈史料21〉天保八年五月二十日

同廿日、定日寄合

一 仁風一覽一件引合候事

〈史料22〉天保八年五月二十三日

五月廿三日寄合

一 仁風下書北組之部、南組惣会所へ請取候事

右下書参り候二付、中飯後々夫々引合書記し、下書新三郎殿へ相渡

し置候事

〈史料23〉天保八年五月二十六日

同廿六日

一 新三郎殿へ、仁風之掛紙不足二付、早速為摺相渡し候事

〈史料24〉天保八年五月三十日

晦日、仁風一件二付読合、夫々相改候事

〈史料25〉天保八年六月二日

六月二日

一 仁風一件読合引合せ寄合致候事

〈史料26〉天保八年六月五日

六月五日、定日寄合

一 仁風一件読合候事

〈史料27〉天保八年六月六日

六月六日

一 同日、仁風之内二相伺申度所在之候二付、安井御宅へ罷出相尋候所、年行司手元二而壹体二願本差出可申由、尤施行人之内代判相記在之向キ、代判名前張紙致差出し候様御申二候、直様寄合致張紙致候事、但し柳原氏宅かり寄合候事

〔史料28〕天保八年六月七日

同七日、仁風便覽、願本二仕立、安井御宅へ差出し置候所、同日夜南組惣会所へ差紙参り、明八日五つ時、年行司老人安井御宅江罷出候様申参、藤徳四郎罷出候所昨日被出候仁風之内張紙落書損等在之候二付、得与相改差出被申候事

〔史料29〕天保八年六月九日

六月九日

一 同日、仁風便覽書入等在之候二付、新三郎方へ徳四郎出向ケ、引合置可申候事

〔史料30〕天保八年六月十二日

六月十二日

一 仁風便覽之内二、町名斗名前無之分少々在之二付、永瀬氏御宅へ罷出相尋候所、一応手元二而引合見被申由、本差置候様被仰聞引取候事

〔史料31〕天保八年七月一日

一 七月朔日、昨夜南組々、明五つ時安井氏へ罷出候差紙参り罷出候所、跡月廿七日差出置候仁風便覽二少々直し在之、并願本二仕立願書相添差出し候様被仰聞候二付、直様会所寄相改夫々相調候二付、直二安井御宅へ持参致而預り置与被仰聞候事

〔史料32〕天保八年八月十一日

八月十一日

一 惣会所へ借受在之候施行人名前、書扣、御引合二付差出し候様使参り、三郷共帳面皆々差戻し候事、但し南組へ差出し候、尤北組之分ハ先達差戻置事

〔史料33〕天保八年八月二十三日

八月廿三日

一 北組惣会所へ呼使参り、藤徳罷出候所、永瀬様御申達仁風便覽、御調之上彫刻御免二相成候趣被仰聞、則願本持帰り候事

一 仁風便覽、願本新三殿へ相渡置候、并二板下之義申付置候事

〔史料34〕天保八年八月二十七日

八月廿七日

一 仁風便覽板下新三認、小口少々出来二付彫料市田へ聞合、今日越治へも聞合遣し、何れ式軒へ□為彫立、嘶合致置候事、并序跋板下者余人二為認度、但し御家流□又者見事之手跡、銘々聞繕居申候事

一 京都越後屋治兵衛へ仁風便覽板下登候事

一 市田治郎兵衛へも板下相渡し置候事

一 京都加藤勘助へも板下為相登候事

〔史料35〕天保八年九月六日

九月六日

一 仁風便覧板下校合立合致候事

〔史料36〕天保八年九月二十日

九月廿日

一 仁風便覧板木出来候分相改候事

但し板下出来候分校合引合せ違候処、相直さし候事

是迄出来候分校合引合せ相済候分、板木屋へ夫々相渡し候事

〔史料37〕天保八年十月五日

十月五日、定日集会

一 仁風便覧、彫刻追々出来、夫々受取候事

并ニ板下追々出来、校合致、市田・越治・加藤三軒へ夫々相渡し候事、尚又京越治へ金壺両壺歩、河内木綿屋へ為替頼参り、則手形持

参ニ付相渡し遣し候事、右取渡一条河太老人方ニ相記し有之事

一 市田へ、仁風便覧板下八丁、当席へ呼掛相渡し候事

〔史料38〕天保八年十一月二日

十一月二日

一 仁風便覧不残彫揃候ニ付、役中立合校合致遣し有之分、夫々校

合之通り相直し候段申付、校合之分摺本相渡し候事

〔史料39〕天保八年十一月三日

十一月三日、北組惣会所、只今罷出候様呼使参り、罷出候所、永瀬様御出勤、仁風便覧上ケ本之義、先日伺申上置候処、右上ケ本之義

者、先御城代様が被仰渡候事故、右校合摺本差出し御覧之上、別摺二ても夫々御方江差出可申候哉、尚跡が御沙汰可在御座候段御申被成候事

〔史料40〕天保八年十一月五日

十一月五日、定日寄合

一 仁風便覧板木彫揃候ニ付万事為相談之、今夕方惣寄会致候事

右之通立合相談相極メ候事

立直段五匁五分、壺割引正味銀、仲間中へ売直段也、

御行司へ、本壺部ニ付正味銀壺匁定、当役へ仕入引請候事、尚又惣

年寄中へ、元仕入直段相談之上半紙ニ相認メ差出し候事

〔史料41〕天保八年十二月十二日

十二月十二日

一 仁風便覧出来ニ付、上ケ本夫々八部、外ニ三部相添差上候事、

但し上ケ本帳ニ扣在

〔史料42〕天保八年十二月十四日

十二月十四日、七つ時惣寄合

一 仁風便覧御丁触ニ付、直段之義申上候様ニ惣年寄中が被仰候ニ

付、是又一統相談之上六匁ニ相定、御触流し可願出候相極り申候事

〔史料43〕天保八年十二月十五日

十二月十五日



一 仁風便覽出来二付、上ケ本八部外二三部、都合拾壹部、書付相  
添北組惣会所へ差出し候事、委細は上ケ本帳ニ記し有之

一 右売出し二付、三郷町々江直段書相記差出し候様、惣年寄永瀬  
様仰被聞、惣評之上六匁ニ相定メ、三郷触願書差出し候事、尤差  
定帳へ扣有之事

〔史料44〕天保九年一月十一日

戊正月十一日、定日集会

一 仁風便覽一件帳拵、委細書致候事

〔史料45〕天保九年一月十六日

正月十六日

一 仁風便覽一件、諸勘定別帳相認メ候事

〔史料46〕天保九年一月二十二日

正月廿二日

一 北組惣会所御呼掛にて、永瀬様仁風便覽御触出書付之写御渡  
し被成候、則左之通り

御触出し書付之写

近年米価高直ニ付、貧窮飢人之救合之義、此度本屋共令板行候  
書物仁風便覽壹部壹冊

ニ付、代銀六匁宛本屋共かり売出し候由、届候もの共買取候様

三郷町中可触知候、

以上

酉十二月

右之通、御触出し有之候様被仰聞候事、

〔史料47〕天保九年二月六日

二月六日

一 薩摩屋様、今辰表御通行之節御申付被成候、先達而仁風便覽三  
郷町触出し候、御請書差出し可申候様御申付被成候事、早速御請書  
下書相認メ置、御掛り下書差上相尋参り候事

一 京都へ、返状并仁風便覽壹部差登せ候様申参り候事

〔史料48〕天保九年二月九日

二月九日

一 仁風便覽、先達三郷町触願上候付、薩摩屋様御請書差上持上致  
候事

表 『仁風便覧』 版行経緯

本表は『大坂本屋仲間記録』（大阪府立中之島図書館編 大阪書籍株式会社）第四巻出勤帳四および第十六巻開板御願書扣一から抜粋し、作成したものである。

表番号は抜粋記事の日時順に適宜割り振った。同掲の史料群番号と共通である。

内容欄は同掲の史料本文を翻刻したものである。補足欄は第四巻出勤帳および第十巻諸記録忘備集内に確認できた人物・役職・事例を注記した。

表 番号	年 (天保)	年 (西暦)	月日	内 容	補 足
1	4	1833	11月25日	施行を行う人々がいるので、先年開板の『仁風一覽』の様に名前を記して開板をしたいとの願い出しが、秋田屋良助からあった。詳細を（奉行所へ）窺った上で返答すると答えた。	秋田屋は以下秋良とする
2	4		11月26日	昨日秋良から願い出された一件について、それぞれ旧例を調べて相談したところ、もう一度秋良を呼び寄せて問い合わせ、調べるべきだと相談があった。	この日は惣寄合日
3	4		11月29日	北組惣会所から年行司一兩人へ呼び掛けがあったので、渋川・森本兩人が罷り出たところ、秋田屋源兵衛から売り出された「ほどこし日記」という一枚刷りについて尋ねられたので、行司は一切知らない事だと返答した。それは差支えの有る事だと仰せ付けられたので、（兩行事は）承知して引き取った。ただしこの件に関しては行司の心得で取り計らう様にと仰せ付けられた。	秋田屋源兵衛は以下秋源 渋川・森本は年行司
	4		〃	秋源一件を取り調べたところ、「ほどこし日記」三編一枚刷りの内、二編は近江屋弥兵衛が彫刻したものであったので、秋源・近弥兩人を呼び寄せ尋ねたところ、兩人共版木と卸売で売れ残った分を持参して詫びたので、自訴として取り計らうと口上書を差出し、他に誤り一札を取り、売り出した分は取り戻して差し出すよう申し付けた。	近江屋弥兵衛は以下近弥
	4		〃	25日、秋良から申し出された施行人名前書についても、惣年寄衆の御沙汰は何うまでも無い事であるので、秋良を呼び寄せ、出版はしてはならないと申し付けた。	
4	4		12月20日	綿屋喜兵衛が、「ほどこし鑑」の板木を差し出した。口上書印形を取った。	綿屋喜兵衛は以下綿喜 「ほどこし鑑」売り出しの記録は無し
5	7	1836	9月16日	薩摩屋仁兵衛より、京橋靱蔵寄合所へ参る様差紙があり、橋本老人が罷り出たところ、米穀高値に付き戯作見立一枚刷りを売っていると言われるので、差し障りにもなる事なので、今後売り出さない様にとの御内意があった。引き取った後すぐに役中で集会を開き板元を吟味したところ、河宗・今辰が素人から頼まれて売っていたことが判明したので、すぐ兩人を呼び寄せ、一札を取り板木を差し出させた。売れ残った刷本三枚も取り、この事を薩摩屋へ藤徳から返答した。	薩摩屋仁兵衛は天満組惣年寄。
6	8	1837	3月15日	将基嶋から、行司は残らず十六日五時までに罷り出る様差紙が来たので、役中が罷り出たところ、永瀬様・安井様兩人立ち合いの上で仰せ聞かされたのは、近來米穀高値で難渋者が多くおり、御上から御救米が下し置かれ、町人共からも施行を行う者がいた。去る巳年以來江戸表から御褒美・御褒詞が下し置かれた分について、享保十九年に仁風一覽が御官刻で御彫刻を本屋仲間に仰せ付けられた事について、これに準じて板行彫刻をしたいという事を本屋仲間から願い上げ出る様、願書を惣年寄まで差し出す様仰せ付けられたので、仲間中で相談の上差し出すと返答し、引き取った。施行人別書の御下書を御下げ下さる様申し上げたところ、もっともな事であるので取り計らうと言い聞かせられた。	永瀬様は永瀬七郎右衛門、北組惣年寄。 安井様は安井久兵衛、南組惣年寄。 将基嶋（島）は靱蔵があり、その寄合所か。 去る巳年は天保四年癸巳。
7	8		3月17日	惣寄合の上で、仁風一覽に準ずる、施行をした人の姓名を書き留めた下書を御下げ下さる様、また板行彫刻をしたいので開板を御許可して下さい、この件を口上書を以て惣年寄三人の名前で差し出す事を、一同相談の上で決定したので、すぐに口上書下書を認め、明18日に安井様御宅へ差し出した。	この日は九時から仁風の件について惣寄合が開かれた。
8	8		3月18日	17日の書付を安井様へ藤徳・河直が持参した。	河直は河内屋直助。
9	8		3月19日	安井様から呼び掛けがあり、藤徳が罷り出たところ、惣年寄方から下書が差し出され、この通りに認めて早々に差し出す様に仰せ付けられたので、20日早天に書付を差し出して引き取った。	
10	8		3月20日	仁風一件書は別帳を拵えるので、下書も追々控えておこう、新三郎へ申し付け、仮帳とした。	新三郎は書手か。
	8		〃	仁風一件を今回彫刻するにあたり、序文を河太から樹下先生へ頼んだ。すぐ仁風一覽二冊を預けた。	河太は河内屋太助。 樹下先生は樹下定賢。

11	8	3月22日	南組から差紙が来て、五つ時に役中残らず罷り出る様にとの事。罷り出たところ、先日願書を差し出した施行一件の御許しが仰せ付けられたので、役中が印形を差し出し、御下書八冊を拝借した。それから会所で寄合、控え本相談・筆記方を新三郎へ申し付けた。	
12	8	3月26日	五つ時に行司一人が西御寄所へ罷り出る様差紙が来たので、河義・藤徳四郎兩人が行ったところ、永瀬様から言い聞かせられたのは、先日渡した施行書の件で、(永瀬様の)御手元も御談示中であるので、年行司は手元に控えがあるのだらう、(仁風の)板行について思い付いた件があれば、遠慮なく下書にし、(奉行所に)窺う様にと仰せ渡された。	河義は河内屋儀助。
13	8	3月29日	26日の件について役中が寄合、御下書の認めが出来たので読み合わせをする事について、惣評をするべく相談の上、慎組の敦九殿へ案内をしたところ、風邪であるので他の組合に遣わしてくれるようにとの返事だったので、組合の内秋市殿へ遣わしたところ、これまた差支えがあり、河宗・今辰殿へ遣わしてくれとの返事があった。	敦九は敦賀屋久兵衛。 秋市は同じく慎組の秋田屋市五郎。
	8	〃	柏清殿が出席して、役中で打ち寄り話し合いの上で相談におよび、所存の内容を、下書を認め惣年寄方へ差し出した。	
14	8	3月30日	今月22日に、安井御宅で施書八冊を御下げ下さったので、これを書き写し、今同人御宅へ持参し返上した。ただし御先方は請取書は差し出さない様に言い聞かされた。	
	8	〃	施書板行について、思い付いた件を下書で認め差し出し、追って御沙汰があると言い聞かされた。	
15	8	5月1日	南組から差紙があったので河直が罷り出たところ、素人板で制作した施行鑑一枚刷りを、売り止める様に仰せ渡されたが、その件は(河直には)少々分かりかねたので、即刻藤徳四郎が南組に罷り越し、惣年寄衆に面会して、売り止めに関しては見合わせたいと、三人衆へ断りをした。	
16	8	5月2日	惣年寄東御寄合所から年行司に御呼び掛けがあったので、藤徳老人・河直兩人が罷り出たところ、(惣年寄)御立合の上で、この度素人が市中で施行をした名前並びに員数等を書き表し、一枚刷りを制作した事については、素人の事であるので惣年寄方から直々に御調べがあり、解決したという事を言い聞かせられた。この他に一枚刷り前後二枚は、仲間内の者である綿屋喜兵衛から売り出したとの事、これは御公儀への御差支えとなる事であるので、急いで取り調べて申し出る様にと仰せ付けられたので、引き取った上ですぐ仲間内で聞き合わせたところ、住吉から売り出しているとの事なので尋ねたところ、綿喜から買ったと言うので、綿喜方へ明三日早天に会所へ罷り出る様にと差紙を遣わした。	綿喜は天保四年時に「ほどこし鑑」版木を差し出している。今回は売り出している事から別物か。
17	8	5月3日	2日の件について綿喜が罷り出た。待っていたところ、四つ時頃に綿喜が罷り出たので、昨日(惣年寄から)言われた内容について詳細を聞いたところ、(綿喜が言うには)板行彫刻したのは全く私ではございません。難波村光泉寺に同居している平一郎という者の方で彫刻を刷り出し、私方で売ってくれる様に参り、売り出したものでございます(という事だった)。平一郎へ(事の)始末を糺しに行き、同道すべきだと考えて罷り越したところ、(平一郎は)他国へ行って留守であったので、(事の始末は)分かり難かった。家内に有り合わせの板木二枚・刷り本七十九枚を持参していたので預かり置き、決して売ってはならないと申し付け、この内容を口上書として差し出させ取り置いた。追って沙汰を申し付ける。	
18	8	5月6日	綿喜から売り出された施行録二枚物は、彫刻をした者が他国へ行き、(仔細が)分からなかった事を、薩摩屋様へ報告した。もっとも板木二枚並びに売れ残りは共に行司の手元へ留め置いていると申し上げた。同日南組惣会所へ出て、天満組・南組の施行人細書等を申し受けて帰った。	
	8	〃	九つ時から寄合、それぞれの(資料を)引き合わせて中書になるよう掛け引きをして彫刻をし、市田へ申し付けた件を相談の上、掛下引下書を河太老人へ持参して申し付けるつもりである。掛書が出来たら早々に刷るため、新三郎へ(掛書を)渡し、中書を認めさせる様に。全ての下書は藤徳殿へ預ける事。	市田は市田治郎兵衛。
19	8	5月9日	仁風一件について調べ、中書を新三郎殿へ申し付けた。中書掛板が出来たので、諸口紙二百枚を、河太の所で刷る事。ただし南組方の下書は、新三郎殿へ預け置く事。	
20	8	5月14日	仁風的一件について引き合わせをする。	
21	8	5月17日	仁風的一件について読み合わせ並びに書き入れをする。	
22	8	5月20日	仁風一覧的一件について引き合わせをする。	
23	8	5月23日	仁風下書北組の部を、南組惣会所から受け取った。下書が来たので、昼食の後それぞれ引き合わせて書き記し、下書を新三郎殿へ渡し置いた。	
24	8	5月26日	新三郎殿へ、仁風の掛紙が不足しているので、早速刷らせて渡した。	

天保期大坂における施行とその背景

25	8		5月30日	仁風の一件について読み合わせをし、それぞれ改めた。	
26	8		6月2日	仁風の一件について読み合わせ・引き合わせの寄合を行った。	
27	8		6月5日	仁風の一件について読み合わせをする。	
28	8		6月6日	仁風の内であつたい所があつたので、安井御宅へ罷り出て尋ねたところ、年行司の手元で一体にして願本を差し出す様にとの事。もっとも施行人の内に代判と記されている場合には、代判名前を張紙し差し出す様に申された。すぐに寄合をして張り紙をした。ただし柳原氏宅を借りての寄合だった。	
29	8		6月7日	仁風便覧を願本に仕立て、安井御宅へ差し出し置いたところ、同日夜南組惣会所から差紙が来た。	
	8		6月8日	明8日五つ時、年行司一人が安井御宅へ罷り出る様にとの事だったので、藤徳四郎が罷り出たところ、昨日出された仁風の内、張り紙落ち書き損じ等があつたので、しっかりと改めて差し出す様に伝えられた。	
30	8		6月9日	仁風便覧に書き入れ等があつたので、新三郎方へ徳四郎が出向き、引き合わせをした。	
31	8		6月12日	仁風便覧の内に、町名ばかりで名前が無い記述が少々あるので、永瀬氏御宅へ罷り出て尋ねたところ、一度手元で引き合わせて見るとの事、本を差出置いていく様聞かされ、引き取った。	
32	8		7月1日	昨夜南組から、明五つ時に安井氏へ罷り出る様差紙が来たので罷り出たところ、先月27日に差出置かれた仁風便覧に少々直しがある、また願本に仕立て願書を添えて差し出す様言い聞かせられたので、すぐ会所に寄合改め、それぞれ調べたので、すぐ安井御宅へ持参し、預かり置くと言い聞かせられた。	
33	8		8月11日	惣会所から借受があつた。施行人の名前を書控えて御引き合わせのため差し出す様に使いが参り、三郷共帳面を全て差し戻した。ただし南組へ差し出した。北組の分は先達で差し戻し置いた。	
34	8		8月23日	北組惣会所から呼び使いが参り、藤徳が罷り出たところ、永瀬様御申達の仁風便覧が、御調べの上彫刻御免になったと聞かされ、すぐに願本を持ち帰った。	
	8		〃	仁風便覧の願本を新三殿へ渡し置いた。並びに板下の件を申し付けた。	新三は新三郎か。
35	8		8月27日	仁風便覧の板下を新三が認め、小口が少々出来たので彫料を市田へ聞き合わせ、京越治へも聞き合わせを遣わし、どの二軒へ彫立をさせるか、話し合いをした。並びに序文・跋文の板下は余人に認めさせたく、但し御家流の物かまたは見事な手跡の者としたいので、銘々聞き繕う事。	京越治は越後屋治兵衛。
	8		〃	京都越後屋治兵衛へ仁風便覧の板下を登らせた。	
	8		〃	市田治郎兵衛へも板下を渡した。	
	8		〃	京都加藤勘助へも板下を登らせた。	
36	8		9月6日	仁風便覧校合の立ち合いをした。	
37	8		9月20日	仁風便覧の板木で完成した分を改めた。但し板下で完成した分で校合引き合わせて違つたところは直させた。これまで完成した分で校合引き合わせが済んだ分は、板木屋へそれぞれ渡した。	
38	8		10月5日	仁風便覧の彫刻が追々出来たので、それぞれ受け取った。	
			〃	市田へ仁風便覧の板下八丁を渡すため、当席へ呼び掛け渡した。	
39	8		11月2日	仁風便覧が残らず彫揃つたので、役中が立合い校合をした分は、それぞれ校合の通りに直す様申し付け、校合の分の刷本を渡した。	
40	8		11月3日	北組惣会所から、今から罷り出る様に呼び使いが参り、罷り出たところ、永瀬様が御出勤で、仁風便覧の上げ本について、先日伺つたところ、上げ本については、まず御城代様から仰せ渡された事であるので、校合刷本を差し出して御伺いの上、別刷等でもそれぞれの御方へ差し出すべきだろう。なお後から御沙汰があるだろうと（永瀬様は）申された。	この時期大坂城代は間部詮勝。 天保八年七月二十日から着任。
41	8		11月5日	仁風便覧の板木が彫揃つたので、万事相談のため、今日夕方から惣寄合をした。 立合い相談で決定した事は、立値段は五匁五分、一割引き正味銀を、仲間への売り値段とする。御行司へ、本一部に付き正味銀一匁定めて、当役へ仕入を引き受ける事。また惣御年寄中へ、元の仕入値段を相談の上で半紙に認め、差し出した。	
42	8		12月12日	仁風便覧が完成したので、上げ本をそれぞれ八部、他に三部を添えて差し上げた。ただし上げ本は帳に控えがあり。	
	8		〃	仁風便覧完成を三郷町々へ御触流しの願い上げをした。	
	8		〃	惣年寄方から仰せ付けられたので、この内容を願書に認めて差し出した。ただし上げ本は控えが帳に記しあり。	

43	8		12月14日	仁風便覧の御丁触に付き、値段の事を申し上げる様に惣年寄からおっしゃられたので、これまた一同で相談の上六匁に定め、御触流しを願ひ出す様に決定した。	
44	8		12月15日	仁風便覧の完成したので、上げ本八部、他に三部、都合十一部を、書付に添えて北組惣会所へ差し出した。委細は上げ本帳に記した。	
	8		〃	仁風便覧売出について、三郷町々へ値段を書き記して差し出す様、惣年寄永瀬様から言われ、惣評の上で銀六匁に定め、三郷触の願書を差し出した。差定帳へ控え有。	
45	9	1839	1月11日	仁風便覧の一件帳を拵え、詳細を書いた。	
46	9		1月16日	仁風便覧の一件を、諸勘定別帳に認めた。	
47	9		1月22日	北組惣会所から御呼び掛けがあり、永瀬様が仁風便覧の御触れ出し書付の写しを御渡しになった。内容は、近年米価高値であるため、貧窮飢人の救合について、この度本屋共から板行した書物仁風便覧を、一部一冊に付き代銀六匁ずつで本屋共かり売り出しするとの事、届いた者共で買い取る様三郷町中に触れ知らせる様に、との物だった。この様に御触れ出しが有った事を聞かされた。	
48	9		2月6日	薩摩屋様が、今辰表を御通行の節に御申し付けなされた。先達で仁風便覧の件の三郷町への触れ出しをし、御請書を差し出す様御申し付けなされた。早速御請書下書を認め、御掛り下書を差し上げて（薩摩屋様へ）尋ね参った。	
	9		〃	京都から、返上並びに仁風便覧一部を差し登らせる様に申し参ってきた。	
49	9		2月9日	仁風便覧の事を、先達で三郷町触で願ひ上げたので、薩摩屋様に御請書を差し上げ、持ち上げた。	